

## 審査員総評

**相馬 千秋** (NPO 法人芸術公社代表理事、アートプロデューサー)

今回初めて ACY U39 アーティスト・フェローシップの審査に関わらせていただいた。応募総数 56 件から 5 件を採択する。端的に言って、倍率 10 倍以上の狭き門である。美大卒業後や留学帰国後にプロのアーティストとして認められるまで、何度もこうした審査や選考の「狭き門」をくぐり抜けねばならない。56 件の応募資料を拝読する長い時間の中で、いかに「若手アーティスト」であること自体が、今日の社会で生存をかけた試練であるかを痛感した。私の感覚では、56 件のうち 20 件くらいは、横浜の芸術の担い手としてサポートを得るに相応しい活動に思われた。今回採択されなかった申請者の皆さんは、どうか希望を無くさないでほしい。こんなに門が狭すぎることで自体が問題なのだ。

舞台芸術分野では、演劇の応募が少なく、面接審査まで進んだのは 3 名の振付家だった。その中で、横浜で十分な活動実績と明確な活動計画を提示した小暮香帆さんと下島礼紗さんに応援の声が集まった。美術分野では、丁寧なリサーチを独自の問題意識と絡めてドラマトゥルギーを編み上げ、レクチャーパフォーマンスという形式で展開する佐藤朋子さん、ジョイス・ラムさんの活動が高く評価された。2 年連続で採択となった佐藤未来さんは、料理本のリサーチを軸にした意欲的な新作プランにさらなる期待が寄せられた。以上が審査の経過である。

個人的には、言語化できる以前の違和感をまだどこにもない表現へと押し出したいという衝動を感じられる申請者の存在にひかれた。しかし、そうした存在は、10 倍以上の狭き門では複数の審査員の合意を得られずすぐに振り落とされてしまう。10 年後、20 年後に花開く才能は、申請書というフォーマットでは測ることができないのかもしれない。審査する側としては、申請書に盛り込まれたキーワードやそれに反応してしまう自らの目を疑う謙虚さをもって、まだ見ぬ才能と向かい合わねばならないと思う。

**藤原 徹平** (フジワラテッペイアーキテクトラボ代表、横浜国立大学大学院 Y-GSA 准教授)

ACY の U39 アーティスト・フェローシップは、美術分野と舞台芸術分野の領域にとらわれずに応募できる点が特徴である。今年は音楽分野からの応募が多数あったが、古典的な枠組みをどのように脱して新しい芸術を試みるのか、伝わって来るものは少なかった。舞台芸術分野の中でも特にダンス分野の応募が活発で、応募者の質も高かった。横浜において、若手の振付家や踊り手を支援するプログラムや場所が充実してきていることを感じる。一方で、演劇分野からの応募が少なく、中規模の劇場が不在であることなど、横浜における演劇活動の基盤が縮小している状況が顕になっているように感じた。

美術分野については、候補に残った方のコンセプトや方法論が似通っていることについて、審査の中で議論があった。もしも、これが横浜の美術教育がつくる地域的な特徴であるならば、その背景を自覚し、集団的個性としてさらに磨いていく方向もあるだろう。あるいは、状況への批評性をもったアプローチを志す作家をどうやって横浜が引き付けていくのかという横浜の美術環境全体への問題提起も可能かもしれない。

映画分野からの応募があったのは個人的には面白いと感じた。横浜で映画を学んだ濱口竜介氏らの躍進も踏まえ、都市の映画、横浜でこそ可能となる映画について深い考察を期待したい。

地域とのリレーショナルなプログラムを無理に提案に組み込んでいる応募が複数見られたのであえてここに私見を書くが、このフェローシップは、新しい文化の可能性を希求していく、横浜という都市の本性をよく表すものである。無理に地域という文脈に落とし込まず、他のフェローシップでは実現できないような、世界に向けて自身の表現を拡張していく起点を探求する応募をさらに期待したい。

**山峰 潤也** (東京アートアクセラレーション共同代表、ANB Tokyo ディレクター)

この助成金の良いところは、作品に与えられるものではなく「アーティストの活動」に贈られる点と、「美術」「舞台」の二つの分野が存在することにある。活動助成はアーティストが横浜に学業・生活・制作などなんらかの形で地域になんらかの影響を与え、異分野が共存することには横断性を持った活動への回路が開かれる可能性が生まれていく。もちろん今回応募のあった「美術」「舞台」に限らず今回応募のあった「映画」などの分野の作品も入ってくることは歓迎すべきことであろう。また、横浜には、「急な坂スタジオ」や「ST スポット横浜」「横浜赤レンガ倉庫1号館」などのコンテンポラリーダンスを育成する施設があり、美術においては「東京藝術大学大学院映像研究科」があることが今回の審査結果には色濃く反映された印象となった。

こうした状況の中でひとつ気になることがあるとするならば、それぞれの領域の強みと審査方法との相性が、審査中の議論にも現れていた点にある。奇しくも3人の芸大映像科関係者が選出されることとなったが、ここからはリサーチをベースに映像と調査結果を巧みに構築しながら、歴史や社会の諸相を組み込むことを得意としたアーティストが多く輩出されている。今回、審査資料や面接、それぞれにおいても言語的やりとりが主体となったため、実作品の評価よりも理論構築の精度が高評価につながりやすい状況があった。しかし、芸術体験というものは、必ずしもこうした言語的知性によってだけ語られるものではなく、肉体や空間的言語によって示されることに魅力がある。今回の審査においては、この傾向が見えやすくなった形となったが、小暮香帆のように身体表現を起点に、音楽や美術家、他の分野のパフォーマーとの非言語的コミュニケーションから表現を起こしていく場合、その結果を言語的に規定することはかえって足枷になることもある。地域での活動を評価するこの助成の特性を生かすならば、存在感、求心力といった評価外に置かれがちな（しかし芸術の土壌を作る上で重要な）力の存在も念頭におきながら、ことの起点となりうる表現を育てることに視点を裂かれてもよかったのではないかと思う。

**小野 晋司** (横浜赤レンガ倉庫1号館館長、チーフプロデューサー)

U39 アーティスト・フェローシップは、アーティストの未来に繋がる年間の活動を伴走型で支援することが特長です。多様な領域と繋がってリサーチを深めたり、新たな創作に取り組んだり、表現者としての転換点に挑戦する等の年間を通じた活動を評価したいと考えています。今回は書類審査から面談まで「独創性」「影響力」「実現性」の3つの視点で選考が進行しました。私は「創作活動における課題や問題意識」「今後のビジョン」から、横浜を拠点にどのように活動を発展させることができるのかを重視しました。このような年間活動支援型のフェローシップはタイミングがとても重要なため、つくり手の創作姿勢や活動プロセスと現在を的確に捉えるよう日頃努めています。今回は対象とならなかった方も決してあきらめることなく再挑戦していただきたいと思えます。

この度の選考全体を通じて横浜における芸術文化の生態系について考える機会になりました。芸術文化に携わる私達は地域や分野の生態系を意識しながら取組を更新する必要があると思います。今回の56アーティストからの申請は、横浜の創造環境へのリアルな声でもあります。社会の変化に回答して独創性の高い活動を繰り広げて世界へ繋がること、困難な社会状況によって縮小した出会いと対話・交流の機会をつくり出すことを期待しています。

**木村 絵理子** (横浜美術館主任学芸員)

2016年度に「創造都市横浜における若手芸術家育成助成クリエイティブ・チルドレン・フェローシップ」としてスタートした本プログラムは、2020年に「U39アーティスト・フェローシップ助成」と名前を変え、今年で7年目を迎えます。本プログラム最大の特徴は、特定の展覧会や公演に対する資金援助ではなく、アーティスト自身の年間を通じたキャリアアップのための支援であるという点です。今現在、あるレベルでの作品発表の機会はあるが、「その先」へ進むことを目指すアーティストたちにとって、作品発表とは異なる活動、いわゆる充電期間を必要とする場合が多くあります。例えば、じっくりと腰を据えた国内外でのリサーチや、専門家たちとの協働、仲間同士での議論や試作のためのプラットフォームを作っていくことなど、すぐには形にならないけれど、必要なステップを踏むための支援として、本助成は存在しています。今回採択された5名のフェローには、わかりやすい結果とは性質の異なる、深みや広がりを感じられる成果が得られる一念になることを願っています。

一方で、これは横浜だけに限ったことではありませんが、ステップアップを目指すアーティストのための公的な発表の場は減っています。ここ数年の間に、上述のような充電活動のための申請よりも、発表の機会を貪欲に求める申請が増えていることに、皆さんの中での強い危機感を感じました。

そして最後につけ加えておきたいのは、今回惜しくも選からもれた申請には、特定のプロジェクトの実施を目的にするのではなく、もっとベーシックな活動を深めて欲しいと思うものや、もう少し考えを深めておくことが可能なのではないかと思われるものなど、「来年もう一度申請して欲しい」という願いをこめた判断になったものが少なくなかったという点です。今年選ばれなかったことは、将来に渡って否定された訳ではありません。ぜひ来年、再来年と再挑戦して欲しいと願っています。